

## 世界の言語研究所（13） 欧州現代言語センター （オーストリア）

著者	杉本 明子
雑誌名	日本語科学
巻	13
ページ	123-125
発行年	2003-04
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1328/00002105/">http://id.nii.ac.jp/1328/00002105/</a>

## 欧州現代言語センター (オーストリア)

杉本 明子 (国立国語研究所)

### 1. 設立の経緯・目的

欧州現代言語センター (The European Centre of Modern Languages: 以下, ECMLと略す) は、オーストリアのグラーツ (Graz) にある。ECMLは、オーストリアとオランダの主導のもと、1994年に欧州評議会 (Council of Europe) の一機関として創設された。

欧州評議会は、ヨーロッパ共通の外交・安全保障、及び、経済・社会・文化・科学の発展のために結束することを目的としているが、主要な問題の1つとして言語教育にも力を注いできた。1993年に発効したマーストリヒト条約によって、EU市民はEU諸国内での自由な居住、学問、労働、開業等を保証され、政治、経済、文化の交流も活発に行われるようになったが、その際に立ちはだかったのが言語の壁であった。欧州評議会は、この言語問題の解決を目指し、ヨーロッパの多様な言語・文化の相互理解と欧州市民同士のコミュニケーションを促進するために、言語学習・教育の改革と支援の方針を打ち出した (『現代言語に関する勧告』1998)。このような流れの中で、当初3年間の期限付きで創設されたECMLは、1998年にその継続が正式に承認されたのである。

ECMLの役割は、ヨーロッパの言語政策の履行と現代語の教育・学習への革新的なアプローチの促進であると定義されている。その主要な目的は、1) 現代語の学習と教育の実践に焦点を当て、それらの支援・改革をすること、2) この分野に関わる様々な専門家の間の対話や情報交換を促進すること、3) 言語政策や言語教育を推進する人材を育成すること、4) 関連機関のネットワークや研究プロジェクトを支援することである。

### 2. 機構と活動

2002年9月26日現在、ECMLには、33か国が加盟している。加盟国は、アルバニア、アンドラ公国、アルメニア、オーストリア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、ブルガリア、クロアチア、キプロス、チェコ共和国、エストニア、フィンランド、フランス、ドイツ、ギリシャ、ハンガリー、アイスランド、アイルランド、ラトビア、リヒテンシュタイン、リトアニア、ルクセンブルク、マルタ、オランダ、ノルウェー、ポーランド、ルーマニア、スロヴァキア共和国、スロヴェニア、スペイン、スウェーデン、スイス、マケドニア旧ユーゴスラヴィア共和国、英国である。欧州評議会の加盟国が全て参加・支援しているわけではなく、関心のある国のみが参加し協同でプロジェクトを推進している。欧州評議会の加盟国であれば、評議会への届け出によっていつでもECMLへ加入す

ることができる。

ECMLの運営委員会は、各国から1名ずつ選ばれた代表者で構成されている。その中から、2年期限で委員長1名、副委員長2名、執行委員2名が選出される。運営委員会は、ECMLの活動の中期プログラムを決めるとともに、プログラム実施状況のモニターと予算の管理を行い、また、様々な活動、将来の展望、運営に関する年間報告書を作成して欧州評議会へ提出する。

ECMLの活動としては、1) 現代語の学習と教育に関する優れた実践例を収集し普及する、2) 言語習得と教育に関する国際的研究プロジェクトを推進する、3) 国際的なワークショップ・セミナー・会議を開催し、言語政策担当者、研究者、教師教育担当者、教科書執筆者、その他現代言語に関する様々な専門家に講演や意見交換の場を提供する、4) ECMLの活動を発展・普及させ、文献・リソースを充実させていくことなどが行われている。成果は、報告書、ニュースレター、インターネット等を通じて発信される。

また、ECMLは、加盟国の言語教育の研究所・協会と協同プロジェクトも行っている（例えば、欧州委員会、KulturKontakt<オーストリア>、The Institut Français<フランス>、The Goethe Institut<ドイツ>、The British Council<英国>とのプロジェクト）。このように、ECMLは、ヨーロッパの言語教育・学習を促進するための機関の共同体としての役目も担っていると言える。

### 3. プロジェクトのテーマと中期プログラム

ECMLは、様々なテーマでワークショップ、研究プロジェクト、会議等を実施しているが、主要なテーマとしては次の6つがある。

#### (1) バイリンガル教育

バイリンガル教育は、多言語使用や外国語教育に力を入れるEUでは重要なテーマである。これまで、『ヨーロッパのバイリンガルの学校』『中等教育におけるバイリンガル・クラスの教授法』等についてワークショップが開かれた。「Bilingual education in secondary schools: Learning and teaching non-language subjects through a foreign language」(1996)などの報告書が刊行されている。

#### (2) 教師教育

『多文化・多言語教育のための教師教育』『初等教育における教師の育成』等に関するワークショップが開かれている。報告書としては、「The challenge of in-service training for foreign language teachers in primary schools」(1995)、「The initial training of modern language teachers」(1996)などがある。

#### (3) 学習者の自律性

『自律的言語学習とリソース・センター』『成人のための言語の授業でいかに学習者の自律性を促進するか』等のワークショップが開催された。このテーマに関連して、「Learner Autonomy in modern languages」(1997)等の著書や「Language and culture awareness in learning and teaching for the development of learner autonomy」(1996)等の報告書が刊行されている。

#### (4) インターネットとマルチメディア

『外国語の授業でのコンピュータ』『外国語学習と教授におけるマルチメディア』『言語の授業におけるコミュニケーション手段としてのインターネット』等のワークショップが開かれた。「Cyberculture」(1997)等の著書や「Cultural work in the information society: Comments to the Council of Europe Recommendation」等の報告書が刊行されている。

#### (5) 異文化理解

『言語学習と教授における言語と文化意識』『外国語の授業における異文化間コミュニケーション能力の発達』等のワークショップが開催された。「Cultural awareness and language awareness based on dialogic interaction with texts in foreign language learning」(2001)等の著書や「Migrants and minorities in the community」(1997)等の報告書が刊行されている。

#### (6) 年少学習者

『子どもの発達と早期外国語学習』『年少者へのテーマ別外国語教育』等に関するワークショップが開かれた。著書としては、「Foreign language learning in primary schools」(1997), 「Young people of the year 2000 – Active members of the local community, participants in regional life, citizens of Europe」(2000)等がある。

2002-2003年の中期プログラムでは、「言語教育の準備と実施」「言語意識・異文化理解・多言語使用」「情報とコミュニケーション・テクノロジー」「言語教育における国際協力」に焦点が当てられている。また、「教師教育における変化」「ヨーロッパ共通の枠組み」「学習者の自律性」「バイリンガル教育」「翻訳」「欧州言語年」等も関心テーマとして取り上げられている。

以上のように、ECMLは、ヨーロッパの多言語教育政策を推進するための中心的役割を担ってきた。その活動の成果は、21世紀の大きな課題である異文化交流と相互理解に関する新しい視点を提供してくれるだろう。

なお、ECMLのホームページ ([www.ecml.at](http://www.ecml.at)) に、より詳細な活動の紹介、出版物の一覧とダウンロードできるレポート、スタッフ紹介、中期プログラムの紹介、フォーラムの紹介等が掲載されている。